

# 「資料紹介」

図書資料部の近着資料のなかから数点を選んで紹介します。その他の近着資料については『アジア経済資料月報』をご覧ください。

スティーブ・ピコ著，峯陽一・前田礼・神野明訳：  
俺は書きたいことを書く——黒人意識運動の思想  
—— 現代企画室 1988年 458p.

1970年代に南アフリカ共和国の反アパルトヘイト運動の主流を占めたのは黒人意識運動であった。この運動の創始者であるS・ピコは、1977年9月にプレトリア警察署内で30歳の若さで拷問死した。ピコについては日本でもすでにD・ウッズ著，常磐新平訳『ピーコウ』（サンリオ社）や映画「遠い夜明け」の上映によって紹介されている。これらに対し，本書はピコ自身の演説，書簡，南アフリカ学生機構(SASO)ニュースレターへの寄稿論説（本書の標題はフランク・トークの筆名で書いた一連の論説に基づく），裁判における証言を通して，かれの思想の発展が把握できるように編集されている。

まず，1969年に南アフリカ全国学生連盟(NUSAS)から黒人学生のみによるSASOが分かれた経緯について，SASO議長であったピコは一連の演説や書簡で述べたのち，SASO結成のイデオロギー的基盤となった「黒人意識」について，白人とアフリカ人の文化概念の相違から説明する。すなわち，黒人意識とは「本質的に黒人が自らの同胞と共に，自分達の活動の根拠——その肌の黒さ——の下に団結する必要を自覚することであり，自分達を永遠の隷属に縛りつける鉄の枷から解放するために，一つの集団として活動すること」（第8章）と定義し，これに基づき，教会やバンツースタン政策の欺瞞性をあばき出している。その解放手段として「第1に黒人の劣等感による心理的抑圧からの解放，第2に白人人種主義社会における物理的抑圧からの解放」

（第14章）の必要を説いている。

訳書は原書とは違い，序章に編者A・スタップスの簡潔な伝記と巻末に私的回想録，友人B・ピジャーナの黒人意識運動の位置づけがあり，読者の理解を容易にしている。

（林 晃史）

和田正平編：アフリカ民族技術の伝統と変容：国立民族学博物館研究報告別冊 12号 733 + xip.

本書は，「1985年から1987年にかけて行われた国立民族学博物館の共同研究『アフリカ諸民族の技術法の整理と分析』の成果の一部として，また1987年に出版された『アフリカ 民族学的研究』を構成する「第2部 生活技術」の部分の「続編として編纂されたもの」であり，この共同研究に参加した15人の日本人アフリカ研究者の論文を収録している。ミクロな空間を対象に集中的な調査を単独で行なうことを「民族技術」としてきた民族学研究の成果であるにもかかわらず，そして各執筆者はこの伝統にほぼ忠実であるのだが，本書全体としては広大な熱帯アフリカを，東，中部，西アフリカ（ただし，南部アフリカという章立てはない）について各5篇ずつと，きわめてバランスよく網羅しており，読者の鳥瞰的嗜好を満足させてくれる。

しかし，本書のタイトルからはここに収録された諸論文が各対象地域の差異をこえて，共通の視点として各地域の「民族技術」（この用語自体が耳新しいが）に焦点をあてているものと期待させるが，各執筆者の視点，問題関心は，もっと幅広く多様であることは「目次」や編者（和田正平）の「はしがき」をみてもわかる。その多様さは，「技術」ということばの理解の幅に

もようが、なぜこの15の論文が「アフリカの民族技術」の名のもとに一冊の大著にまとめあげられたのかわからなくなるほどである。

また「西欧諸国が大航海時代からアフリカ諸民族と接触し、やがて軍隊等が内陸へ侵攻、植民地支配を確立した後は、本格的に民族誌を発達させ、標本資料の収集と搬出を行なったのに対し、日本におけるアフリカ諸文化の収集調査はほとんどがアフリカ諸国の独立以降に限られており、標本資料の蓄積度に大きな較差がある」（「はしがき」）として、研究活動の一層の推進を促す姿勢には、民族学至上主義のニオイが感じられなくもない。

（原口武彦）

---

ファティマ・ミーア著、楠瀬佳子訳：ネルソン・マンデラ伝 こぶしは希望より高く 東京 明石書店 1990年 687p.

---

南アフリカの反アパルトヘイト運動の指導者ネルソン・マンデラ氏が獄中から釈放されたのは昨年（1990年）2月11日のことである。釈放直後の氏の演説が世界中に衛星中継されてから早くも1年がたち、アパルトヘイト体制の根幹となる諸法律の撤廃の方向が南アフリカ政府によって提示された。

本書は現在ANC（アフリカ人民族会議）副議長として活動しているネルソン・マンデラ氏の半生の記録である。著者ファティマ・ミーアは夫とともに反アパルトヘイト運動に関わりさまざまな活動の制約を受けるなかで、氏をとりまく人々の証言に基づいて本書を書き上げ、のちに獄中にあった氏との3回のインタビューによって部分修正も行なった。本書は氏の政治活動の記録であるが、南アフリカのアパルトヘイト体制の歴史の記録ともなっている。

もちろん生い立ちや家族関係の記録も見逃せない。ネルソン少年は地域の長老からアフリカ人の歴史の話

を聞かされた。それは、白人がやって来る前の古き良き時代とその後白人によって土地をだまし取られてしまった時代を少年の心に深く刻みつけることになった。彼が政治活動に関わり次第に人々の信望を集めるにしたがい政府の迫害はエスカレートして家族にまで及んでいく。ことに妻ウィニーに対するものについては詳しく触れられている。そのような迫害はマンデラ氏周辺のみならず非白人すべての人びとに起こっていただろうと推察できる。家族でさえ（家族であるがゆえに）自由に会ったり話したりすることのできない社会なのである。また、氏の人間性溢れる人柄もよく理解できる。

アパルトヘイト体制廃止への方向は示されているものの、この体制が人々の心に与えた傷は深く、本当の民主的な体制ができるまでには今後も困難があるだろう。私たちは注意深くその行方を見守っていかなくてはならない。

4部31章からなる本文に130ページに及ぶ氏の獄中からの手紙、年譜、訳注にくわえて釈放直後の演説の全文も付されている。とくに訳注は南アフリカ問題そのものの理解に大いに参考となるだろう。

（鈴木陽子）

---

国際農林業協力協会：熱帯アフリカの土壌資源 1990年 124p.

---

アフリカの農業に多少なりとも関心のある者であれば、土壌の持つ意味がいかに重要であるかを理解することは容易である。たとえば、アフリカ農業が停滞する原因の一つとしてしばしば「土地がやせている」ことがあげられたり、またアフリカの伝統的無耕起農法の合理性が「土壌の性質に適している」ことから説明される。しかし、こうした説明がどの程度正確なのか、あるいはどの程度一般性を持つのか、素人のわれわれには実際のところよくわからない。社会科学の立場か

ら農業にアプローチしようとする場合にも、土壤に関する正確な知識は非常に重要なのである。

しかし、残念ながらこうした知識を与えてくれる文献は多くない。日本語文献ではなおさらである。その意味で、本書は農業技術者を対象としており専門外の者には多少難解であるとは言え、きわめて貴重である。

本書は、熱帯アフリカの土壤の性質およびその管理利用法を概説した第Ⅰ編と、特に低地土壤における稲作の可能性について論じた第Ⅱ編とから成る。専門外のわたくしにとっては、アフリカ全体に目配りのきいた第Ⅰ編から学ぶところが多かった。ここでは、土壤に対する養分の添加は不可欠だが、アフリカにおいては水分と養分保持力が恵まれていないために、方法を間違えると施肥の効果がほとんどなくなる恐れがあるという指摘が興味深い。著者が強調するコスト面の問題と合わせ、いわゆるヨーロッパ流の有畜農業をそのままアフリカに持ち込むことはできないのである。

とするならば、アフリカの農業技術基盤から飛躍することのない農業発展の可能性はどこにあるのだろうか。本書では、第Ⅰ編ではアレイ・クロッピング (Alley Cropping: 樹木や灌木を生け垣のように植え付けた間に食糧作物を栽培する方法) が、第Ⅱ編では小渓谷における水田耕作が、将来的に可能性のある農法として取り上げられている。

難解な箇所も少なくないが、日本語文献としてこの種の本が出版されることは非常に有意義である。農業に関心を持つ人々に広く読まれることを期待したい。

(武内進一)

---

大阪外国語大学アラビア・アフリカ語学科スワヒリ語研究室：スワヒリ&アフリカ研究 第1号  
1990年 193p.

---

体制の整備は遅れている。特にアフリカに関するものはそうである。大阪外国語大学は1981年に日本で最初のスワヒリ語講座を設置した。90年度にはスワヒリ語専攻の修士課程も開設された。貴重な存在であるといえよう。

そのスワヒリ語研究室が昨年4月に創刊したのがこの雑誌である。創刊号の内容を見ると、大きくスワヒリ研究編とアフリカ研究編に分かれている。雑誌のタイトルと内容の構成から窺われるように、スワヒリ語・スワヒリ文学の研究を柱としつつも、広くアフリカ研究を扱うという編集方針のようである。

スワヒリ研究編には、論文として、中島久氏の「スワヒリ語の文型——分類試論(1)」と宮本正興氏の「シヤアバン・ピン・ロバートの推敲——小説『クフィリカ』の場合」が、資料・研究ノートとしてカレガ・ムタヒ博士 (ナイロビ大学言語学・アフリカ言語学科長) の「ケニアにおける言語と政治 (1900-1978)」(小森淳子氏による訳と解説) と梶茂樹氏の「私のパンツ—語研究」が載っている。

アフリカ研究編の方には稗田乃氏の“Koegu: A Preliminary Report”, 戸田真紀子氏の「民族問題への『制度論』的アプローチ——ナイジェリアとタンガニーカの比較において——」, 宮脇幸生氏の「生業の変遷と色彩語彙の変化——エチオピア西南部クシ系農牧民ツァマイの色彩語彙についての予備報告——」の3点が論文として収められている。資料・研究ノートには梶茂樹氏の「映画『人生は楽し』のムエゼ・ンガングラ監督に聞く」と勝俣誠氏の「社会科学として見るアフリカ」を収める。

日本ではアフリカの専門誌は、アフリカ学会の『アフリカ研究』, アフリカ協会の『月刊アフリカ』, われわれの『アフリカレポート』しかなかった。ここに『スワヒリ&アフリカ研究』という新しい仲間ができたことをうれしく思う。

(児玉谷史朗)

第三世界の問題に対する関心の急速な高まりにもかかわらず、日本の大学におけるこの面での教育・研究

板垣真理子： おいでよアフリカ 晶文社 1990年  
314p.

初めて板垣さんに会ったとき、ふしぎな人だなと思った。旅行のことや写真のこと（板垣さんはプロの写真家なのだ）など向かい合って話していると、自分が透明人間になったような気がしてくる。写真をとる人の眼、というのだろうか。板垣さんの〈アンテナ〉が、わたしの名刺や顔でなく、彼女だけにみえる「わたし」に焦点を合わせている——そんな感じだった。

『おいでよアフリカ』は、その〈板垣アンテナ〉が西アフリカの各地をまわった旅の記録である。都市、音楽、祭り、神、女性。したこと見たこと聞いたこと感じたことをあふれるような勢いでどんどん書き記していく。

「……新しい場所に足を踏み入れたとき、私は必ず何かしらその場から発せられるサインを受け取る。言いかえれば、ウェルカムの合図だ。……バオバブの森を歩いた時には、シャッター音に答えるように私を見つめ返したバオバブ達の視線。ドゴンの郷では、カラバシ（ひょうたんを半分に切った万能の鉢）に汲まれたビールの底から上がってきた可愛らしい泡たちの行列がぶつぶつとはじける音。そんなちょっとしたことがらのなかに、私は自分だけが受け取れるサインを見つけるのが楽しい」

等身大の旅行記のなかに、ときどきこんなハッとする表現が顔を出す。このアフリカ旅行で撮った写真がもうすぐ刊行されるというから楽しみだ。同じ旅のなかから、写真として切り取った板垣さんのアフリカは、どんな姿を見せてくれるだろうか。（津田 みわ）

丹埜靖子編：（文献解題）ケニアの教育——文献からのアプローチ—— アジア経済研究所 1990年 249p.

アジア経済研究所の海外派遣員としてケニアと、その旧宗主国であるイギリスに滞在したが、本書は、この時期に収集したケニアの教育に関する資料情報を整理し、解題を付けてまとめたものである。

本書にはおよそ1600点にのぼる文献資料が収録されているが、「文献目録の作成に当たって文献の取捨選択を行う必要があった」という『まえがき』から、編者が膨大な文献を収集したうえで、その内容を検討・吟味したことがうかがえる。

こうした文献収集は文字どおり根気と忍耐とを必要とする作業であり、その努力に対して多くの読者は敬意と賞賛を惜しまないだろう。

それにもかかわらず、本書に問題がないわけではない。たしかに編者は膨大な文献資料を取捨選択したことを率直に認めているが、少なくとも評者が見る限り、取捨選択の基準となった編者の問題意識は示されていないのである。

もちろん、編者は「本書で取り扱う『教育』の概念は、狭い意味で、主としてヨーロッパ的な意味での教育である。取り上げた文献も主として現代ケニアの正規の教育（フォーマル・エデュケーション）に関するものが中心であり、伝統的な「教育」の概念とは明らかに違っていることを断っておきたい」と述べてはいるが、なぜ「伝統的」な教育ではなく、「正規」の教育に関する文献を取り上げたのかという編者自身の問題意識は十分には提示されていないように思われる。

研究者が問題意識を明らかにすることは、自らの人間的な限界を吐露するものであり、できることならそれを避けたいというのがわれわれ研究者のホンネかもしれない。しかし、それが読者とのあいだの強い信頼と深い共感を築く道にほかならないとすれば、そのための努力を編者に求めても不当ではないだろう。

（細見眞也）

本書の編者は1987年4月から89年3月までの2年間、